

京極家の墓地

京丹後市指定文化財



吉原の常立寺にある京極家の墓地も“まちの文化財”として町の指定になっています。 第12号

京極家の墓地は、旧峯山藩主京極家初代の高通から第十一代の高富に至るまで石碑十二基を含むもので、上段の墓域と京極家紋章入りの棟門並びに築地塀、門から墓域に至る参道を含め約400平方メートルの地域です。

元和八年（1622）京極高通が（丹後十二万三千七十五石を宮津・田辺＝舞鶴＝・峯山に分割されて）初代峯山藩主となってから明治維新まで一貫して世襲されて続き、歴代藩主像と共に、その墓石が揃っているものです。

墓地の一隅には、所によって神木とされ、古来笏にも使用される木で竹の葉に似た葉は古く鏡の裏や守り袋に入れて災難よけにしたという^{なぎ}榎の大木があり珍しいとされています。

歴代藩主の法号

初代^{たかみち}高通 道山大居士

二代^{だかとも}高供 道栄大居士

三代^{たかあき}高明 道意大居士

四代^{たかゆき}高之 道倫大居士

五代^{たかなが}高長 道仙大居士

六代^{たかひさ}高久 道徴大居士

七代^{たかまさ}高備 道俊大居士

八代^{たかます}高倍 道融大居士

九代^{たかつね}高鎮 道樹大居士

十代^{たかがげ}高景 道完大居士

十一代^{たかどみ}高富

じょうりゅうじ
常立寺 絹本著色釈迦十六善神像

京丹後市指定文化財



峰山藩主京極^{きょうごくし}氏の歴代藩主肖像画が伝えられている峰山の常立寺には、絹本著色釈迦十六善神像1幅があり、町の指定文化財となっています。

十六善神とは、「般若^{はんにやきょう}経とその誦持者とを守護する善神で7千の眷属^{けんぞく}を従えています。名称には異説がありますが、唐代に金剛智が描いたのを空海が伝えた神主形は、釈迦仏を中心に左右に文殊・普賢^{もんじゆ ふげん}、法涌と阿難^{げんじょう}、玄奘^{ふかさくたいしやう}と深沙大将对して並べ、さらに十六善神を二分して並べられており、わが国では古来大般若会^{だいぱんげえ}のときにまつる」といわれるものです。(仏教語大辞典中村元著)

常立寺の十六善神像は、画風は描線本位ともいえる暢達の墨線を用い彩色を控えめとしたもので、南北朝時代の作と推定されています。箱書によりますと、もと高野山自昌院の什物と伝えられています。

(箱書)

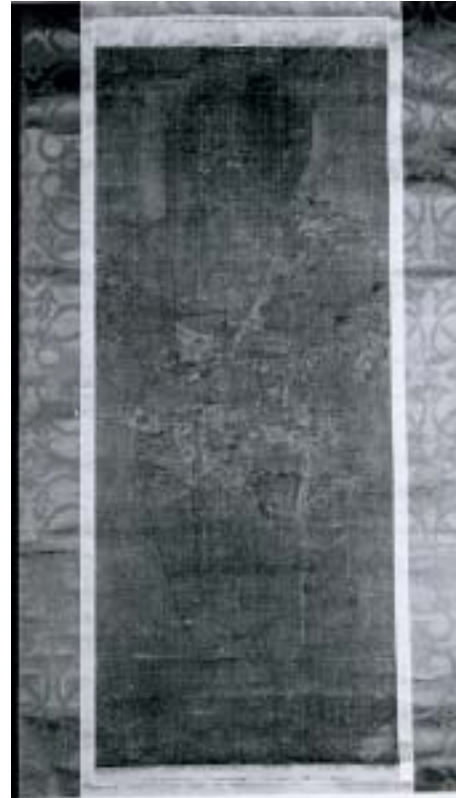
此十六善神之像者当国浅茂川九左衛門寄付之元禄十六年中願主拝覧之表具服

紗箱被修造之古キ箱ノ上書ニ云高野山自昌院什物五筆大師御筆ト云々洞誉（花
押）

常立寺 絹本著色不動明王像

妙沢筆 1幅

京丹後市指定文化財



峰山町の吉原にある常立寺には、京極藩主像や絹本著色釈迦十六善神像などと共に、町指定文化財 第2号 の絹本著色不動明王像があります。

款記はありませんが描写からみて妙沢の作と考えられています。妙沢は龍湫周沢といい天竜寺の夢想国師に師事し、同寺の寿寧院に住した、徳治二年（1307）～元中五年（1388）、鎌倉後期から南北朝時代に生きた人です。

妙沢は不動明王像を毎日怠らずに一尊宛描いて二十余年に及んだといわれます。その遺作はかなり多く肉筆と版画がありますが、本図は肉筆であり製作もすぐれています。（写真では残念ながら不鮮明な複写しかできません）

時代 ・南北朝時代

法量 ・縦 81.0 センチ ・横 33.2 センチ

常立寺 歴代藩主肖像画

紙本著色京極高通像

京丹後市指定文化財



殿様寺とも呼ばれる常立寺には、丹後峰山藩主だった京極家初代藩主京極高通（安泰院）の肖像画があります。像主は束帯に身を正し、笏を持ち、上畳上に端座する姿で描かれています。

図中に、靈巖寺（京極家江戸菩提寺）の中興の祖といわれる第三世大譽珂山79才の賛が、次のように書かれています。

寛文五乙巳十二月十四日

安泰院雪峯道山大居士

靈巖寺第三世

大譽珂山七十九（花押）

この他に、同紙本著色で歴代藩主肖像画が、初代の父高知^{たかとも} 二代高供^{たかとも} 三代

たかあき 高明 四代高之^{たかゆき} 五代高長^{たかなが} 六代高久^{たかひさ} 七代高備^{たかまさ} 七代高備の息高総^{たかふさ} 八代
たかます 高倍 九代高鎮^{たかつね} 十代高景^{たかかげ}と、11代揃っており、峰山町指定文化財第3号に
指定されています。

